NewsLetter

対話型協働探索＋科学技術イノベーションで小さな農業の新しい可能性を生み出す
ニュースレター

佐渡市・新潟大学「生物多様性と農業技術革新が共存するエコロジカル・コミュニティの実装に向けて：里山創生「佐渡モデル」の構築」プロジェクト

No.03
March 2020

里山農業の未来デザイン

世界農業遺産の島、
佐渡の里山の風景や農業文化を
次世代に繋ぎたい。

このプロジェクトは、佐渡島の小さな農業を支えるために佐渡市と新潟大学がはじめた、生物多様性と農業技術革新が共存する佐渡の里山のみらいのカタチを探る試みです。
ふたつの会議で対話を重ねながら、佐渡の進むべき方向を探っていきます。

里山未来会議
地域の農業者と
技術者・研究者が集う
対話型協働探究の場

ソリューション探索会議
さまざまなシーズ
（技術や知識）を組み合わせ
課題解決のアイディアを探る

活動のきろく
since 2019

プロジェクト参加地域について

谷戸田の多い、生物多様性のホットスポット「新穂潟上」、海に面した台地に棚田が並ぶ、団地型ほ場「歌見田地域」。
それぞれ地域特性も課題も異なる2つの地域。第3回里山未来会議ではそれぞれの地域で未来ビジョンを設定しました。

新穂潟上 集落

❶ 省力型でエコロジカルな農法が普及し、負担を減らしつつこだわりの米作りが進む。
❷ 集落がチームとして農業に取り組んでいる。ただし、楽しく、幸せに。
❸ 交流が活発化し、佐渡の他地域を牽引する役割を果たしている。

歌見田 地域

❶ 省力型でエコロジカルな農法が普及し、負担を減らしつつこだわりの米作りが進む。
❷「新たな農地改革」が進み、農地のさまざまな利活用が展開する。
❸ コメと魚が美味しい地域として認知され、人や資本が集まってくる。

第4回 里山未来会議　新穂潟上 集落

2020年1月25日（土）18:30 ～ 20:30
場所　｜ 潟上集落センター
参加者｜ 28名（うち地域農業者15名）

これまでの話し合いの中で「省力型かつエコロジカルな農法の開発」「チームとして取り組む農業」「外部との交流」をテーマに、様々な取り組みについて議論してきた新穂潟上集落。第4回目となる今回の会議では、これまで話し合いを重ねてきた中で出てきた様々なアイデアを具体的な行動に落とし込むため、次年度のタイムスケジュールを作成しました。
潟上のターニングポイントは、5年後ではないかと言われています。きっと今とは状況が大きく異なるだろうと、地域の農業者は予測しています。これからの5年間でチームを作り上げていくことを目標にしたいとの提案もあった潟上集落は、来年度の活動も盛沢山です。
まずは情報共有が必要ということで、歌見田同様に、情報ツールを使って農地の状況を整理します。組織づくりや販路開拓の勉強会、省力型エコロジカル農法開発の調査研究、耕畜連携の調査ツアー等を行うことになりました。
今回の会議には県内通信制高校の校長先生も参加。生徒に地域や人と関わり学びを実践につなげてほしいと語る校長先生に、地域農業者からは「高校生に潟上を第二の故郷にしてほしい」との声もあがり、高校と連携した新たな教育プログラムの可能性や外部との交流につながりそうです。

第4回 里山未来会議　歌見田 地域

2020年2月26日（水）18:30 ～ 20:30
場所　｜ 歌見公会堂
参加者｜ 15名（うち地域農業者8名）

中山間直接支払交付金の節目となる今年度、耕作の継続を断念する農家が急増することが懸念されています。歌見田の状況はどうなるか・・・佐渡市が実施した農家対象のアンケートの結果と、アグリノートで可視化した農地マップをもとに、次年度以降の歌見田の状況を確認することから会議を始めました。
情報が一元的に可視化されると、今後の状況がよく分かります。「ここが放棄されると水路の管理をする人がいなくなってしまう」「防災の観点からの調査も必要なのではないか」等、新たな課題も話題に上りました。
また農地の課題は、地域の賑わいとも関係しているのではないかという声も。いろいろな人を巻き込む工夫が必要ということで、例えば、島外で暮らす歌見、黒姫、虫崎出身の人たちに故郷を応援してもらうためのしくみを作れないかというアイデアが出てきました。「昔はお盆になると人が集まり田んぼがにぎやかだった。今はさみしく感じる」との思いも語られ、帰省者が増えるお盆に歌見田の試みを発信する機会を作ろうということに。
参加者からのアイデアは止まらず、「危機に直面している歌見田地域の挑戦をドキュメンタリーに撮って、お盆に上映するのも面白いかもしれない」「来年度は揃いのTシャツを着て農作業をしよう」「Tシャツのデザインは歌見に伝わる妖怪「見上げ入道」がよいのでは？」など、楽しいアイデアが語られました。
課題としてあがったのは、プロジェクトに取り組むメンバーと地域住民の情報共有の難しさ。せっかくの取り組みだから多くの人に応援してほしい、しかし、回覧板やSNSなどの活用だけではローカルな情報共有は不十分。地域と密接につながるためのプラットホームづくりが求められています。

おしらせ

2020年度文部科学省「科学技術イノベーションによる地域社会課題解決（DESIGN-i）」助成事業に採択されました！

2019年9月より文科省の助成を受けて進めてきた「里山農業の未来デザイン」プロジェクトですが、審査の結果、2019年度に引き続き、2020年度も継続支援が決定いたしましたのでお知らせいたします。文部科学省にて行った技術提案の内容は次の通りです。

技術開発プラン①
農地の総合的ガバナンスツールの開発
農地のさまざまな情報を集約し、一元的に可視化するための情報ツールの開発を行う。

技術開発プラン②
IBM（総合的生物多様性管理）佐渡モデルの開発
省力型管理の農地へのインパクト調査を実施し、IBM佐渡モデルの開発を行う。

評価委員の方からは、今回提案した技術にとどまらず、農業や農村の問題を多面的に捉えて、さらなるシーズ探索を続けてほしいとアドバイスをいただきました。佐渡島が全国のモデルとなることを期待しての継続採択決定でした。
2020年度は更に視野を広げて教育や観光などさまざまな観点から里山農業を支援するための取り組みを探究したいと考えております。今後もぜひアイデアやアドバイスをお寄せくださいますよう、よろしくお願いいたします。

統括プランナーより

9月のプロジェクト開始からいろいろな課題と対峙し、解決に向けたアイデアを考え続けてきました。まだ「答え」は見えていません。半年の対話を通して、やっとスタートラインに立ったという気持ちです。これからの1年間、さらなるアイデアを探究しながら、一つでも多くの可能性を形にしていきたいと思っています。（豊田）

編集後記

2019年度最後のニュースレターには、プロジェクトの進捗状況を図にして掲載してみました。なんとなくプロジェクトの全体像をつかんで頂けましたでしょうか。こうしてみると地域課題や取り組みが複雑に絡み合っていることが分かりますね。2020年度は更に多方面からシーズを探索していきますので、是非色々な方に参画いただければ嬉しいです。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。（北）

問い合わせ先
新潟大学佐渡自然共生科学センター
tel. 0259-22-3885（担当 豊田・北）　e-mail sado.satoyama@gmail.com

佐渡市　新潟大學 NIIGATA UNIVERSITY　文部科学省

文部科学省「科学技術イノベーションによる地域社会課題解決」助成事業　発行：佐渡市・新潟大学　編集：新潟大学佐渡自然共生科学センター特任助手 北 愛子

地域農業者の声
技術者・研究者の意見
アクションのタネ
検討事項

アイディアとアクションのタネ

里山未来会議で議論した
アイディアの数々と
地域課題解決に向けた
アクションのタネを紹介

アイディアとアクションのタネ

農業収入の向上

新たな経済の創出

- 風景を守り人を応援するための経済を生み出せないか
- 素晴らしい棚田の風景を守っている皆さんを応援するしくみを作りたい！

多様な収入源

- 畜産業との連携で農地を活用できないか
- 農業収入は不安定。稼げるようになることが大切では

販売ルートの開拓

- 米を売るための新しい販路を開拓できないか
- 消費者の声を直接聞きたい
- 東京に行って米を売りたい

歌見田若手会議

- 農業で稼げるようにするには？
- 米以外の作物栽培？
- 風土を生かした米作り？
- 新たな販売ルートの開拓？
- 多様な収入源？

担い手の確保

交流

- 外部との交流を活発化し、地域のサポーターを増やせないか
- 修学旅行生の子どもたちに佐渡を第二のふるさとだと思ってほしい（潟上集落）
- 虫崎では田植えや盆踊りにたくさんの人を呼んでいる。もっと交流を強化したい！（歌見田地区）
- 大学生や若者の柔軟な発想で新しい解決策を生み出せないか
- 大学生を招き、アイディア創出ワークショップを開催したらどうか

教育

- 集落の人口減少が進み、担い手がいない
- 学校との連携で農地を活用できないか
- 授業で田んぼを使ってほしい
- 自然栽培を学べる学校を作りたい
- スマート農業技術も学べるとよいかも
- 海外からの農業実習生を受け入れたい
- 新規就農者を受け入れるしくみが必要ではないか
- 環境にやさしい農業を学ぶ学校を作ることができないか

耕作放棄地の利活用

- まずは自分たちで農地全体の現状を一目で分かるようにしよう！
- 農地バンクなどのしくみは、棚田地域では活用が進んでいない
- 農地は私有地であるため、全体的なマネジメントが難しい
- 耕作放棄地がどんどん増えていく…

農地の見える化

アグリノートで農地状況など情報を集約！
耕作状況で農地を色分けしました

※アグリノートは㈱ウォーターセルが開発した営農支援アプリです

耕作放棄地拡大の悪循環

- あちこちに広がる放棄地
- 放棄地が広がることによる不安や懸念
- 不安や懸念が現実化すると、さらに耕作しづらい環境に
- 耕作の断念

- 害虫が発生しないか
- 水路管理の負担が増えるのではないか
- 土砂崩れが心配
- 生物多様性が低下しないか

- よい条件の田んぼも放棄されてしまう
- 農地を全体的に見ることで集落全体としての課題が明らかになりました
- 農地の現状を多面的に分析したり、情報を集約するツールが開発できないか

どんな情報を統合できるとよい？
- 土壌成分？
- 耕作のしやすさ？
- 生物多様性？
- 耕作状況？

農作業の効率化

- 高齢化が進み、草刈りや防除が大変
- 草刈りや防除の回数を減らすことは出来ないだろうか
- 草刈り回数を減らした方が害虫の発生を抑えられるというデータがある
- 省力型かつ生物多様性にも考慮した農法、IBM（総合的生物多様性管理）佐渡モデルの開発が出来ないか
- ほ場を使って省力型農法の研究を始めよう

スマート農業技術の探索

ドローンによる防除

リモコン草刈機

- 超急斜面・石の多い地質でリモコン式草刈り機は使えるだろうか…
- 最新農機は高額…
- 最新農機の導入で作業の省力化を図れないか
- 農機をシェアするしくみを作る必要があるのでは

チームで取り組む農業

- 関係者間の情報共有を活発化したい

円滑に情報共有するには？
- 回覧板？
- SNS…？

どれも十分ではない

- 集落のチーム意識はどのようにしたら高まるか
- まずはカタチから！ おそろいのTシャツで作業してみよう
- プロジェクトに参画する地域の人の輪を広げたい
- いざという時に助け合える関係性を作りたい
- どのような組織や体制が必要となるのか
- さまざまな組織づくり勉強会をしよう